



観光社会資本の事例

テーマ	鶴見川多目的遊水地
<p>【施設の状況写真】</p>  <p>鶴見川多目的遊水地は、横浜市との共同事業で推進されています。密集市街地の限られた土地を有効利用して、洪水時には治水施設である遊水地として、通常時には、公園・緑地・スポーツ施設として使用できるよう整備を進めています。</p>	
<p>【施設の利用写真】</p>   <p>運動公園内には、散策やレクリエーションフィールド、水や自然と接することのできる親水エリアなどの整備を進めています。</p> <p>国内最大規模、収容人員7万人を誇る、国際大会に対応した日産スタジアム。人々が世界中から集まります。</p>	
<p>【観光資源としての利用状況】</p> <p>鶴見川多目的遊水地は、新横浜駅の近くにあり、都市に住む人々に貴重な憩いの場を提供しています。遊水地内は横浜市が整備する運動公園として、日産スタジアムを中心に、市民が気軽にスポーツやレクリエーションを楽しめる空間に整備を進めています。観光面でも、日産スタジアムにおいて、2002年のサッカーワールドカップでは決勝戦が行われ、世界中から注目されました。また、遊水地内にある「鶴見川流域センター」は、流域交流の場・総合学習の場等として利用されています。</p>	

テーマ	鶴見川多目的遊水地
【社会資本の基礎データ】	
名称	鶴見川多目的遊水地
所在地	神奈川県横浜市港北区
事業名	鶴見川総合治水事業、横浜市新横浜公園整備事業
事業主体	国土交通省 関東地方整備局 京浜河川事務所、横浜市
事業期間	昭和60年～平成22年(予定)
【社会資本の役割・効果】	
治水効果	
<p>鶴見川流域では、流域で雨水を貯めたり、河川整備を行い流域が一体となった総合治水対策を昭和50年代から行ってきました。鶴見川多目的遊水地は、総合治水対策の一環で河川整備の重要な柱として進められているもので、もともと下流域を洪水から守ってきた自然の遊水機能を持っていた地区に遊水地機能をさらに人工的にアップさせ、周辺地域から下流地域までを洪水の危険から守るように推進しているもので、遊水地機能については平成16年6月より運用を行っています。</p> <p>鶴見川流域では、昭和57年、平成6年等大きな洪水被害が発生してきましたが、多目的遊水地の運用開始により、洪水調節の効果として、水位の低減が可能となり、平成16年の台風22号の出水では125万m³の洪水流を貯め込み、亀の子橋水位観測所では約1.5m水位が低下しています。</p>	
【位置図】	
【関連ホームページ】 京浜河川事務所 http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp	
横浜市環境創造局 http://www.city.yokohama.jp/me/kankyou/park/shinyoko/	